

令和3年8月6日平和記念式典で放鳩



毎年8月6日の「原爆の日」に平和記念公園で営む平和記念式典で、平和の象徴・ハトが一斉に飛び立つ。平和式典で飛ぶ鳩たちは原爆慰霊碑の横にケージを置き、松井一実市長の平和宣言が終わると一斉に飛び立った。平和式典で飛ぶ鳩たちはそれぞれの帰巢本能で飼い主の鳩舎に帰る。昨年は新型コロナウイルスの影響で放鳩は行われなかったが今年は市が関係団体に鳩を出せるかを調査。一定にレースや訓練を再開できているとして、提供を依頼された。ボランティアで鳩を持ち寄る飼い主たちは2年ぶりの晴れ舞台に向けて訓練に励んだ。この式典に参加した中国支部連盟会長の細川清さん＝同県熊野町＝は本番に備えて鳩舎の周りで朝と夕に鳩を飛ばす。「やっぱり鳩が飛ばない式典は寂しい。再開はうれしい」とほほ笑む。

細川清さんは約150羽の鳩を飼育しており毎日の世話を欠かさない。鳩を飼う目的として『レース』と言い切る。スタート地点からそれぞれの鳩小屋まで帰還するタイムを図るレースを行っている。春・秋に行われるレースで勝利するために毎日の訓練は欠かさない。ヨーロッパではギャンブルとして大人気でスペイン・バルセロナの大会では2万7000羽の鳩が一斉に飛び立ち、放鳩の様は圧巻である。細川清さんによると『馬以上に血統が重要。より良い血統で長い距離を帰って来るのが鳩レースの魅力。賞金が入ってくることは日本ではない。銭金ではなく男のロマン』と話した。

しかし、マンションの増加で飼育場所が減り、ペットの多様化も進む中、鳩の飼い主は減少し、高齢化が進んでいる。それでも、細川清さんは80歳までは鳩レースを続けたいと意欲をみせている。80歳といわずそれ以上に鳩レースを続けてほしいものだ。

ルーマニアで 1800kを帰還した
血統鳩を持つ細川清さん

